



日本記者クラブ

「在日外国人からみた小泉政権5年」

小泉さんは何を「改革」したのか

フィナンシャル・タイムズ東京支局長

デイビット・ピリング

2006年6月14日

page 2

“ポップスター”の登場 小泉さんって何だったのか！？

page 3

「経済改革」を総括すると・・・ 97年がリストラ元年

page 4

「経済改革賞」は橋本さんに 「やらなかったこと」の貢献

page 5

竹中さんの功績 小泉改革とは「政治改革」のこと

page 6

小泉さんは都市型リーダー 日本を「普通の国」に

page 7

靖国参拝はベストか？ ジェスチャーの芸術

page 8

レーガンも「単なるショーマン」だった

pages 8-11

質疑応答

©社団法人 日本記者クラブ

私が初めて「小泉純一郎」という名前を耳にしたのは、まだ私がイギリスに住んでいるときでした。2001年というところで、ちょうど私が日本に赴任する1年前ぐらいのときだったのです。そのときにいろんな人たちがうわさしておりまして、日本で全然みられなかったような政治家が出てきたんだ、といったような話で盛りあがっていました。

小泉さんは風貌もちょっと変わっておられましたし、ウェーブのかかったヘアスタイルでもあったということで。それから小泉さんが選挙運動の間中、白手袋をはめていることも珍しいことのように報道する外国メディアもあった。でも、日本に来てから、それが日本の選挙戦では普通なことなだと分かりました。日本ではタクシーのドライバーでさえも白手袋をはめているんですからね。

小泉さん、しゃべり方も変わっておられました。短いフレーズで、ズバズバと物をいうので、普通の日本人に非常にわかりやすい。特に女性の人気が高かったということで、若い女性の間では彼を前にすると、うっとりということで、まるでポップスターの前に行ったような印象を持つといったようなこともいわれていました。

“ポップスター”の登場

外国の報道人の目からみますと、まさに小泉さんというのは、イメージ的にはポップスターのような政治家であったということです。そして小泉さんはほんとに心からエルビス・プレスリーを崇拜なさっていて、実は誕生日も同じだということなんです。ちょうど総理になったころ、時を同じくして、小泉さんはレコードを録音なさっていて、その中でエルビス・プレスリーの歌をみずから歌われている。おそらくエルビス・プレスリーの生まれ故郷であるグレースランドで、ジョージ・ブッシュとデュエットを歌って、それで退場するということになるかもしれません。私としても、ぜひこのイベントを取材したいと思っておりますので、いまからそのときに備えて耳栓を買いました。

いずれにいたしましても、小泉さんはそれまでになかったような、日本では非常に異色な政治家であったということです。外国人の目からみますと、1

990年代というのは、官邸の主が白髪頭の人がもう次から次へと変わったといったようなイメージがありまして、かなり日本事情通の外国人でも、頑張らないと日本の首相の名前1人でも挙げるのが難しいんじゃないかと。

ポップスターとか、変人とかアウトサイダーとかいったイメージを持った小泉さんではありましたが、彼にはそれらとは別に「何か」があった。(余談ですが、私は小泉さんがなぜアウトサイダーという定評を持つに至ったのかがよくわからない。というのは、考えてみると、お父様なりおじい様なりは、お二人とも非常に卓越した自民党の政治家であられたわけですから、いずれにしてもそこが小泉さんのマジックというところだとは思いますが)。

小泉さんの「別の何か」とは、経済的なアジェンダでした。「小泉こそは改革を断行する政治家だ」と我々は聞かされたのです。

考えてみれば、「改革」というのは妙な言葉です。何でもありと、みる人によって変わるような意味を持っている言葉であるということです。小泉さんの考え方というのは、彼自身の言葉をかりれば、「改革なくして成長なし」、「聖域なき構造改革」ということでまとめられると思います。西欧の人たちもこれをみて、かなりわくわくした人たちもいまして、一、二は我が社の中にもいたんですけれども、ああ、これで日本は変わるぞと。小泉さんが一連の市場改革を断行して90年代の膠着状態から日本を引っ張り出してくれる、というふうに大いに期待をしたものであります。

例えば、予算を大幅にカットするとか、国营企業を民営化するとか、不良会社はつぶす、不良銀行もつぶす、そして根底から日本のシステムを覆してくれるというふうに期待したわけです。

小泉さんって何だったのか！？

小泉さんはそのように喧伝されていたわけでありましたが、現実はどうだったのでしょうか？

小泉さんは9月に退陣を控えておられます。戦後、日本の総理大臣としては3番目に長く務められた方でもあるということであり、そろそろ退陣も間近ということで、より大所高所から「小泉さんって何だった

たのか」を評価できるようなときに来たと思います。

小泉純一郎という人はどういう人だったのでしょうか？何をした人なのでしょう？改革はどういう中身を持っていたのか？彼の日本に対しての影響力はどのくらいこれからも持つものなのでしょうか？いい首相であったのでしょうか？

こういった質問を回避する(じゃなくて答える)前に若干お断りしたいと思います。

第一に(真っ正直に申しあげるのですが)皆様の方がずっと日本についてお詳しいわけで、私は乏しい知識しかない、それをまず前提としているということと、私は単に日本に住んでいて、日本語もあんまりうまくなくて、でもベストを尽くして小泉さんを、広範な、歴史的及びグローバルなコンテキストでとらえようとしてきて、いろいろ拾い集めた知識をベースにして評価しているのだということをまずお断りしておきます。

私の話をお聞きになって、何て私は物知りじゃないのだろう、全く物事を知らないというふうにお感じになるかもしれません。実際そうだと思うのです。でも、一外人として、ジャーナリストとして、日本を報道してきた者としての興味ということでお聞きいただければと思います。そしてもし、何かその興味にかかわるものが私の発言に入っているとしたら、それは皆様方とは違った形で小泉政権を見守ってきた人間の意見というところで面白みが少しはあるということなのかもしれません。

「経済改革」を総括すると・・・

それではまず、小泉さんのいわゆる「経済改革」ということで総括してみたいと思います。

最初に申しあげたいのは、私にいわせると、小泉さんというのは、経済を改革した人というよりは、政治を改革した人ということの方が色彩として強いのではないかと思います。詳しくは後でも述べますが、小泉さんこそ日本のいままでの政治の地図を塗りかえた人だということであります。具体的な改革を断行していまの経済回復があるのかというと、その点では目ぼしいものは殆どなかったのではないかと思います。

小泉さん、もちろんいまの景気回復について、小

泉さんの功績だと思いますし、政治家として自分の功績だと主張することは当然なことです。しかしながら、小泉さん、あるいは小泉政府が現在の経済回復のために多くの貢献をしたのかというと、そうは思えないのです。あるとすれば、大きな政策上のミスを行ななかったということだと思います。

私の意見では、日本の景気回復の背後にある主要な要素というのは以下のものだと思っています。

まず何と言っても時間的な要素が挙げられます。つまり日本の企業が、ポストバブル後の新たな状況に再調整することができるような時間的余裕が与えられたということだと思います。

90年代前半の大半を通じて、多くの日本人たちは、企業も含めて株式市場は確かに下落した、不動産市場も下落した、しかしそれは一時的な現象だと信じて疑わなかったわけです。そして、何年も何年も待ち続けて、いつかは絶対に正常化するというふうに待ち続けた。景気回復はほとんどないものになってしまって、銀行も破綻するものは破綻をし始めたということで、1997年になってようやく、財界人の人たちも、もう世界は様変わりしてしまって、後戻りすることはない、ということに気づいたということだと思います。

97年がリストラ元年

私は97年が日本にとっての本格的な企業部門によるリストラ元年だったというふうに思っております。企業がどんどん減量経営を始めて合併をして、また一時的な労働者を採用し、コストを低減し、またより安価なところに、海外に製造施設を移すといったようなことを始めたのです。このプロセスは、あまりにもスローであったので、西側の観測筋には目立たなくて、気づかれなかったかもしれませんが、粛々と進んでいたということでもあります。もちろん西欧の人はより抜本的な改革の方が望ましいと主張していたわけではありますけれども。

いずれにしてもこの間に、だんだんとグローバルな状況も改善を始めまして、日本もいい位置にだんだんとつくことができたので、好転換ということですから利することができたということだと思います。

特に鉄鋼業のような部門というのは、90年代はもう終わりというふうにいわれていたわけですが、2002年ぐらいまでにはかなり日本の鉄鋼業も本格カムバックを果たし競争力をまた再生するように至ったわけです。中国からの需要が高まったということで、日本企業は大いに利することができ、そのチャンスを物にしたのです。

日本企業は収益を上げ、労働者をふやし、法人税もより多く払うようになった。非常にゆっくりではあったけれども、確実に一步一步日本は、いままでの景気後退から好循環に転換することができたわけであります。

小泉さんは確かに優秀な政治家ではありますが、でもこの「時間の経過」ということについては、自分の功績だとはいえないはずです。

2番目の要素は、「グローバルな環境」だと思えます。2002年からこれまで、「グローバルな環境」はかなり良好であったわけです。小泉さんは、「改革なくして成長なし」といっていました。しかし、もうちょっと正しく表現すれば、「中国なくして成長なし」というふうにいふべきだったかもしれません。

最初の回復が始まったときの2～3年というのは、輸出主導で進んでまいりました。つい最近になって本格的な内需主導型の経済に転換しつつあります。日本の企業がより設備投資をふやし、雇用をふやすようになったからです。ですから、いまの時点ですと、サラリーマン諸氏もより雇用が安定した、また若干給料も上がったということで、個人消費ももう少しふえるかもしれません。しかし今回の日本景気回復の第一弾というのは外需主導で起こったということです。

「経済改革賞」は橋本さんに

ということで、時間の経過についてもグローバルな経済の回復についても、あんまり小泉さん自身の功績とは関係ないところで事態が進んでしまったというのが事実であると思います。

もし、その改革というのが幾ばくかでも意味を持った時期があったのであれば、それは小泉政権のときではなく橋本政権のときだったと私は思っております。

つまり、一見するとあまりおもしろくないような、変革(例えば会計慣行が変えられて、時価会計主義になったとか、連結会計処理が導入されるようになったとか)が、企業の経営マインドを変えるようになったといったようなことであります。1980年代に購入した建物が大きな価値があるというようなふりをするができなくなった。子会社の損失を隠すこともできなくなった。その結果として、いや応なしに企業の方も、私が述べたような改革をせざるを得なくなったということです。

ですから、経済の改革の旗手はだれであったのかということをおえて選ぶのであれば、そしてだれにその改革賞をあげましょうということであれば、その受賞者は小泉さんではなく多分橋本さんだと思うのです。

「やらなかったこと」の貢献

では小泉さんの信じたところの経済改革というのは何の貢献もしなかったのでしょうか?よく支局内でもう一人のひとと議論しているのですけれども、ちょっと逆の観点からみると、小泉さんが日本に対して行った経済回復についての貢献というのは、「やるぞといったけれどもやらなかった部分」にあるのかもしれないということです。

例えば、政権ができたところから、小泉さんは国債の発行額は30兆円を下回るようにするといっていたわけです。でも本当に、まだリセッションが続いていてデフレ状況だったときに、それを実行したならばマイナスの影響、それもありかなり惨憺たる打撃を日本の景気に与えたはずであります。また、片や日銀の方も、最初のころでありますけれども、文字通りどんどんお札を印刷し、それと同時に日本は巨大なドル建資産を買い込んでいた。

小泉政権は、保守的財政政策どころか最初の数年間というのはかなり財政的には、寛大にやってきたということでもあります。いまから考えると、それがむしろ日本のためになったのであろうということで、少なくとも日本の景気回復を阻害するような障害にはならなかったということです。経済がしっかりと足場を固めた後で財政健全化プロセスというものが始まったのです。

人によりますと、小泉さんが竹中さんを金融サービス担当大臣に任命したということが大きなインパクトを与えたといわれております。この任命こそが小泉さんの改革の英断の証拠であるというわけです。これは一理ある説かもしれません。銀行を身ざれいにすることが、心理的なインパクトがあったことは確かですし、投資家に対しても、日本がこれから身ざれいになるというシグナルを送ることにはなった。しかしながら、日本の景気回復の一番大事な局面においては、銀行は、実は貸し出しというのはどんどん減らしていたのです。

銀行は景気を刺激するような役割は果たさなかったし、クレジット創出(credit creation)を通じて日銀の金融政策をより効果的にする手助けをしたということもなかったわけです。多分、日本の銀行が行った最大の貢献というのは、破綻しなかったということだったと思います。

そのころ竹中さんが「大き過ぎてつぶせないようなところはどこもない」という有名なステートメントを行って物議を醸しておりました。つまりこの発言は、もはや日本においては政府が大企業であれ大銀行であれ、つぶれることを許すことがあるのだというメッセージとして受け取られたわけです。

竹中さんの功績

確かに竹中さんは、銀行に対して手ごわく当たりました。そのことは銀行の不良債権処理を速めたという意味ではいいことであったと思います。しかし竹中さんがとったアクションの中で最も重要なアクションというのは、多分納税者のお金を使って、りそな銀行を救済したことであると思います。これをみて、特に外国の投資家に対して、政府がシステミックな危機の状態まで起こすことはしないということが、メッセージとして伝わったということであります。いざとなれば、政府は最終的には税金を使ってでも銀行システムを救済するのだという姿勢が明らかになったということであります。

そして実際に、りそなの救済が起こった後、株式市場も即、反騰をしたわけでありまして、この反騰状況がずうっとつい最近まで続いたわけであり、これが大所高所からみて日本景気にとっての大きな転

換点であったというふうに思います。でも、このこと自体は、あまり改革とは関係なかったし、当時「改革」という言葉で定義されたものではなかった。もし「改革」が「市場を機能させる」という意味であったとすると、りそな救済はむしろ「反改革」と定義した方がよかったともいえるわけです。

でも、りそな救済は極めて現実的かつ賢明な策であったということであり、十分その成果はあがったということであります。

ほかにもいろいろ例を挙げることはできますが、ポイントは、小泉改革の中で具体的に日本の経済回復に決定的なインパクトを与えたものがあったとは言えないのではないかということです。

小泉改革とは「政治改革」のこと

もし小泉さんが言われているような経済の改革者でなかったとすると、そもそも彼は改革者であったのでしょうか？改革者ということで歴史に名前が残るに足る人物であるのでしょうか？それに対する私の答えはイエスであります。彼は改革者であるし、歴史に名が残ってしかるべきであると思います。しかし彼が最も重要な影響を残したのは「政治改革」の世界においてであると思っています。

小泉さんは、自民党を改革するか、さもないとぶっ壊すと言って登場したのですが、結果としては自民党を救ってしまったということになったわけです。そうすることによって、小泉さんはおそらく日本における「政治的経済(political economy)」とでも言うべきものを決定的に変えてしまったのではないのでしょうか。

小泉さんは、まず派閥の力学というものを壊した、壊すまでには至らなくても、少なくとも大幅に減少させたということは事実です。また内閣府の権限をかなり増しました。多分、最も大事なことは、自民党の支持基盤層を様変わりさせたということではないのでしょうか。かつての自民党は地方の票に大きく依存していたのが、現在では大都市に住んでいる人々にも支持基盤を持つようになっています。

そのことは例えば、これからの自民党は従来のような農村部を狙った政策を犠牲にしてでも都会の選挙民のことを考えなければならなくなったというこ

とを意味します。

言うまでもなく、こうした傾向はこれまでもあったものです。多くのリーダーがそうであるように、小泉さんも水面下で静かに進んでいた再編(transformations)が、表面化したものであるとも言えるものです。

こういった変化の福田赳夫さんの時代にまでさかのぼります。彼の政治姿勢は田中角栄さんとは全く相対峙する、相極端なところに位置していたということでもあります。私、マスコミのコメンテーターの田原総一朗さんにインタビューしたことがあるんですけれども、彼いわく、小泉さんのいわゆる改革というのは、単に以前あった田中対福田の対峙関係のものを、実際、身をもって行動したにすぎないのだ、と言っていました。

日本が豊かになっていった1960年代から、自民党は政治・経済のもののやり方というものを発展させました。それは必ずしも民主的でも透明なものでもなかったのですが、日本における奇跡的な成長期ではかなりうまく機能したものです。それは都会が生んだ富を日本の中でも最も貧しい地方にばらまくというやり方で、田中さんの下で完成しました。

田中角栄さんのときに、自分の選挙区に雇用を持ってくる、富を持ってくる、公共事業をたくさん分捕ってくる、それによって道路を敷設し、橋をかけ、また新幹線まで新潟にまで通じさせてしまうといったようなことをやったわけです。新潟に限らず日本中でそのようなことがあった。非常に恩義に感じた有権者の人たちも、お返しにということです。この自民党の政権を認めてきたわけであります。そしてGDPが右肩上がりであるところは皆それでハッピーであったわけです。

小泉さんは都市型リーダー

しかし、だんだんとこの制度がひずみを持ってきたのが1990年代のときでありました。バブル経済が破裂してしまっただけでなく、もう資金が枯渇してしまっただけでなく、それを契機に日本の公的債務もどんどん膨らみ始めまして、現在はGDP比150%ぐらいにまで膨れあがっています。これをみて、日本の企業及び政界のエリートたちも、これではいけ

ないと、昔ながらの国が主導権を握るやり方ではもう続かないという結論に達したのです。昨年9月の選挙において有権者が郵政民営化に賛成票を投じたということが、その証でもあるわけです。

小泉さんは横須賀の出身で、いわば都市型リーダーであるわけです。歴代の自民党党首の殆どが地方出身であったということで、小泉さんは目立つわけですね。で、農民、医師会、建設業界のような昔ながらの支持基盤とはもうきずなを断ち切ることで、小泉さんは日本の都会で圧倒的な勢力を有する無党派層の支持を得ることに成功したのです。普通、無党派層というのは野党である民主党の方に票を入れがちなのですが、少なくとも小泉さんは、一時的であるにせよ、こういった無党派層を自分のものにしたということです。

郵政民営化は、小泉さんにとって日本の金権政治体質を解消する格好の手段となったわけです。その最終的な狙いは、それまで自民党が自分たちの貯金として使ってきた350兆円を公共部門から取り除くことにあったのですが、これは、政府はもっと小さくあるべきであり、民間部門は競争力をつけなくてはならないという小泉さんの信念にフィットするものであったわけです。

日本研究を専門としているアメリカ人の学者であるジェラルド・カーティス教授は、小泉さんの持っている政治的な手腕は、もう長きにわたってフツフツと底流にあった世論の変化を見抜き、それに声を与えたことにあるとして「日本は90年代からこの方大きく変わった。その理由はそれまでの政治的マシーンが崩壊したからだ。変化は社会全体のものであり、小泉はそれに乗ったのだ」と私に語ってくれました。

日本を「普通の国」に

時間がそろそろなくなってまいりましたので、ざっと日本の外交政策についても考えてみたいと思うのですが、かなり外交政策の面では事態はいろいろミックスしていると思います。つまり、小泉さんというのは、全体的な観点から政治的な運命を決めるというよりは、イベントの囚人(囚われの身)になっているような感があります。ある部分では、もち

ろん真の変化と言えるものもあったのですが。

小泉さんは日本を「普通の国」にするという考え方を推進したのですが、その種の概念は別に目新しいものではなく、中曽根総理の時代、もしくはその以前にまでさかのぼっている考え方ではあります。

確かに自衛隊をイラクに派遣したり、憲法改正論議を活発化させたり、また米国と共同ミサイル防衛を行うように日本が協定に調印したということで、小泉さんもそれなりの具体的なアクションはとってまいりました。

それが日本にとって正しい方向なのかどうかについては賛否両論あって、それぞれ一理あると思います。いずれにしても小泉さんはかなり雄弁に、日本はもうこういった時代になったのだから普通の国になってしかるべしと思っている、というふうに訴えてこられたわけではあります。時として小泉さんは強力なリーダーシップを発揮しました。イラクへの自衛隊派遣(私個人としてはそれが正しかったかどうか疑問を持っているのですが)が政治的な勇断であったことは間違いありません。

靖国参拝はベストか？

でもアジアの外交ということになりますと、特に日本の対中外交ということになると、多分小泉さんは処置を誤っているのではないかとと思っています。

もちろん中国側が手ごわく日本に当たってきているので、それなりに日本も対抗しなくてはいけない、だからこういう態度になる、ということもある程度正当な理由であるかもしれません。中国側にいたしましても、国内向けに再三再四、反日カードを切らざるを得ないということもあるでしょう。しかしながら、靖国参拝をもってそういった態度をとるということがベストな方法であるとは、私には思えないのです。どこかで小泉さんが線引きをなさりたいというのであれば、ほかのところで線は引くべきではないか、というふうに思っております。

こと対アジア関係ということになると、ポスト小泉がどなたになるにせよ、小泉路線の踏襲というよりも、それを修復しなければならないのではないのでしょうか。

国内問題への政策の話に戻ります。小泉さんがも

たらした改革は、見かけほどホンモノではないと主張する人もいます。小泉さんのおかげで格差社会が生まれてしまったとか、村上さんや堀江さんが首謀したような、変な形の資本主義ができてしまった、これも間接的に小泉さんがそれを奨励したから、といったような説もありますし、人によっては、政治の世界で小泉さんが行ったことの多くは、すぐに後に戻ることができる、もしくは反転させることができるという人もいます。

その意味で、小泉さんは単なるショーマンにすぎなかったのだと批判する人もいる

外人の目からみると非常に風変わりな人が出てきて、非常に外人の注目を買ったということにはなりますけれども、人によっては小泉さんは上辺だけ、中身はなかったというようにいう人もいる。それがほんとかどうかということですが、確かにこの辺に来て、小泉さんが標榜してきたいろんな面において、政策が裏目に出るようになってきています。

でも小泉さんはかなりの部分ショーマンであるのです。彼は、善かれ悪しかれ、旧態依然とした密室型政治からの脱却を図ったモダンな政治家であるわけです。党や官僚機構を飛び越えて、マスコミを介して直接国民に訴えかけるということでここまで来られた方であるということは事実です。

ジェスチャーの芸術

私は自分の記事の中で、小泉さんの場合、ショーマンシップ(私はそれを”ジェスチャーの芸術”と呼んだのですが)そのものが大切なのだと書いたことがあります。彼はジェスチャーを政策作りのツールとして使っている。記事の中で私は、小泉さんを歌舞伎役者がやるところのジェスチャーにたとえて、「見え」を切っているのだということで書いたのです。

私は、外国人読者のために、分厚い化粧をした歌舞伎役者は眼をぎょろぎょろ回しながら大げさなポーズをとるのだと説明したのです。

聴衆から見ると、こうしたジェスチャーこそが歌舞伎ドラマのハイライトになるわけですが、昨年9月の総選挙において、日本の選挙民は、役者としての小泉さんに魅了されてしまったということだと思います。役者としての小泉首相の演技のうまさは疑

問の余地がありません。

昨年9月の選挙における小泉さんの中心的なメッセージは、自民党(半世紀にわたって政権を独占してきた政党)こそが、変化の媒体(agent for change)なのだというものであったのです。それは、たばこが健康の媒体だと言うようなものですね。

小泉さんは、変化の推進力(force for change)などでは全くなくて、実際には自民党に延命措置を講じてあげたということであったと思います。その意味で、彼は政治的な現状維持のための力(force for preserving political status quo)となってきたとも言えるわけです。

小泉さんを称して「空っぽの貝殻」と呼ぶためにたびたび例に出されるものに、赤字だらけの道路公団の民営化があります。空砲に終わった試みだという人もいます。小泉さんは、いかにも彼らしいスタイルでショーを演出したのです。もろもろの不透明な組織が行った贅沢で無駄な支出を白日のもとにさらけ出すべく、民営化委員会をテレビ中継までやってしまったのです。

でも結局、最終的に決まった民営化の姿については、多くの批判を招きましたし、あれはまやかしにすぎないといったような批判さえ出たわけでありませう。しかしこうした批判は、ある重大なポイントを見失っていると思います。即ち、このようなショーを演出することで、小泉さんは、それまでは暗部に隠れていた、日本における財政という部分に光当てたのだということです。そうして小泉さんは、議論(debate)を始めたのです。

それによって日本の国民は、古い金権政治、つまり自民党が公共事業を通じてお金をばらまくというやり方が正当化できるものではないということを認識させられてしまったというわけです。

レーガンも「単なるショーマン」だった

評論家の中には、小泉さんは「中身がない」ということで、アメリカのレーガン大統領になぞらえる人もいます。レーガン大統領も、「単なるショーマン」ということで批判されることもあったのです。

しかしながら、レーガンさんも非常に万人にわかりやすい言葉で「自由市場」とか「自由」というこ

とを強く訴えかけて、アメリカ国内のみならず海外においても本質的な影響をもたらしたということを否定する人は殆どいないはずです。ある意味、レーガンさんの政策がソ連の崩壊に直接寄与したのです。

小泉さんやレーガンがもたらした変化については、評判の良くない部分もあるかもしれないけれど、二人が自らのカリスマを利用して、自分たちの周囲の世界を形成したということは否定できません。

小泉さんのパフォーマンスは、スタンディング・オベーションを与えるには、ちょっとつぎはぎが目立つかもしれないのですが、大の歌舞伎ファンである私としては、小泉さんは、少なくとも「礼儀正しい拍手」(polite applause)くらいは与えられて然るべきであろうということで総括としたいと思います。

質 疑 応 答

和田正光 (テレビ東京出身) 小泉さんの後の自民党の総裁候補の誰に対してどんな興味を持っていますか？ 小泉改革は、日本版のサッチャリズムであるという人もいます。この次、だれが出てこようとも小泉改革の路線というものを下げるわけにいかない。安倍晋三氏がポスト小泉の有力といわれていますが、果たしてそういうことになると思いますか？

ピリング 私も個人的な意見としては、だれがポスト小泉になっても、いままで小泉さんがやってきたことを根底から覆すといったようなことにはならないと思っています。もういまさら、自民党の総裁、もしくは総理になる人は、政治綱領の中でこれからも自民党は100%農民票に依存していきますとか、金権政治を続けます、といったようなことでは絶対に通用しない世の中になっているということは、みんなが認識しているからです。特に、都市部の有権者層というのは、移り気ですから、そんなこといってしまえばすぐにそっぽを向いてしまって、自民党も支持基盤がさらに縮小してしまう、もしくは政権にいられないようになってしまうかもしれないということでもあります。

後継者は小泉さんが持っていた国民に直接訴えかけるといったような資質も、ある程度は継承する必

要があると思います。もう派閥政治型の密室政治は受けないということですし、これからは程度の差こそあれ、国民に実際直接訴えかけて政策を形成するということが求められるようになると思います。

現在、ポスト小泉の候補としていわれている何人かの方々が、国内政策についていろいろ主張なさっていますけれども、みたところあんまり中身的には差がないようです。リップサービスの的には、「格差社会」になってしまったということで、小泉さんのここが悪かったといったようなことを書いている人はいますけれども、中身にさして変わりはない。ですからこの面ではあんまり個人差はないというふうに思います。

個人間で差がついているのは、国内問題でしたら、財政再建についての考え方だと思います。ただ、安倍さんを支持する基盤の方が、できれば「中国」を争点にしたい、そのかわりにということで、どうも意図的にこの辺の議論を盛り立てているのではないかなというような感もする。それで、財政再建についてはどちらかというと、そのハウツーの方に焦点が当たっています。手順の問題で、名目成長を最初に確保する、歳出カットをできるだけやってその後を考えるという派と、谷垣大臣がおっしゃっているように、できれば早目に消費税率を引きあげた方がいいんじゃないかという説があるということです。で、財政再建はするけれども、どういう手順を踏んでいくかというところで若干差が出ているのだというふうに思います。

安倍さんの方は、増税というのはいつか通らなくては行けない道だけれども、というふうにおっしゃっていて、谷垣さんも、ちょっと早目の方がいいんじゃないかと、その方が速く成長するからといったようなことをおっしゃっているということだと思います。

中国を始めとする、全般的な対アジア外交政策ということになりますと、最近、安倍さんは靖国参拝の問題については若干穏健派になってきた、やわらかい口調になってきた。しかし、中国に対して安倍さんはかなり強硬派であったわけでありましてけれども、最近では、福田さんが立候補するのではないかなということで、いろいろうわさにはなっております。

ではだれが次期総理に一番なりそうかということですが、かなり最近まではということで、安倍さんがそれほど当確になるのではないかなというふうには考えていなかったのですが、結構、自民党派の中でも、反安倍勢力もあるからということだったんですけれども、でも最近、福田さんがほんとに立候補なさるのかどうかということもはっきりしていませんし、今後、さらにダークホースが登場するのかということについてもはっきりはしてない。でも、いまのところだと、だれか十分安倍さんを負かすに足りるような人が出てくれば安倍さんが負けてしまうということだというふうには思いますので、いってみれば、今後どれだけ反安倍勢力が力を結集して、ほかの候補を擁立できるかというところにかかっているのだと思います。

サッチャリズムのこともちょっとお聞きになったのでお答えしたいと思いますけれども、小泉さんご自身もしくは小泉さんの側近の人たちと会見するときに、いつもサッチャーさんの名前があがってまいりまして、経済改革をするに当たって、サッチャーさんはモデルだったんだといったような話をよく聞きます。確かにサッチャーさんは、いま考えてみると、イギリスの経済を革命的に変えた人でもあります。民営化を断行したということで、特に炭鉱の面で改善したということもありましたし、当時、私、ティーンエージャーでしたけれども、ほんとにイギリスを二分したような形で大きな議論が巻き起こっておりまして。当時もほんとに私、サッチャーさんなんて耐えられないと、大嫌いだと思っていました。けれども、いまになって考えてみますと、幾つか彼女がやった措置というのは不可避であった。だからサッチャーという人も歴史をさらに前に進めるようにした人であり、歴史の波にみずから乗った人だというふうに私は評価しています。

それから考えると、小泉さんはずっとマイルドというか、程度がもっとやわらかいと思います。サッチャリズムがあってから20年たっていますが、思い起こしてみれば、レトリック的にはあの時代と似ているものも幾つかあると思います。

内藤茂（NHK出身） 小泉さんは、ワンフレー

ズポリティションといわれます。非常に短い言葉で語りかけるというか、扇動するということですが、ヒトラーもそうでしたね。小泉さんがそれに当てはまるとは僕は思わないんだけど、最近、日本国民が非常にフワフワして、軽い人間になってきている気がするんですね。扇動家が最高権力を持つということの恐ろしさも私は半ば感じているんですが、日本の最近の変化をどう思われますか。

ピリング ワンフレーズの政治家ということで、亀井さんが小泉さんをヒトラーに例えたということがあったかもしれません。しかし小泉さんとヒトラーを比較するのは何の参考にもならないと思っています。やっぱり小泉さんの功績というのは、ディベート（討論）といったものを国民の場に持ち込んだというところではないでしょうか。伝統的には、政治の中枢である官僚機構の内部だけで片づけていた問題とか論議を、国民を介在させる形でオープンに引き出したというところがいいのではないかと思います。

いままででしたら「自民党と官僚機構を信頼してください、信頼してくれたら経済を成長させますよ」ということで、細かいことはいわないで、ということとで来たわけですが、いまはそうではない。国民を広く巻き込んで議論をする環境になったということです。だから、ディベートがオープンになったということであって、それは裏返していえば、もう何十年にもわたって成熟していない形での政治的な論議があった。だからそれを変えるということで、いまは非常にシンプルな形でしか発言がされていませんけれども、これがスタート地点になれば、それほど今後も悲観的にならないで済むのではないかと私は思いますけれども。

内田義雄（NHK出身） ブッシュ・小泉関係についてどう考えられておるか。特に、ブレア・ブッシュ関係と比較して、どこが似ているのか、どこが違うのか。それから、先ほど、小泉さんが退場するときにも、メンフィスでブッシュとプレスリーのデュエットを歌うとびったりだとおっしゃったんですが、ブレアさん退場するときは、どういうのがエン

ディングショーとしてふさわしと思うか。

ピリング 難しいご質問でありまして、いいお答えができるかどうかわからないんですけども、一応ブッシュ・小泉関係というのはメンフィスで終えるということになっています。これは非常に象徴的なことだと思っています。つまり、お互い、非常に相性がよかった。単純にシンプルな信念を共有していたということだと思いますので、まあ象徴的にはメンフィスで終えるのがいいかとは思いますが、でも細かくみてもみますと、実は日米の考え方というのは、差異がいろいろあるのです。よくいろんなところでも日米関係はいまほど最強なときはない、こんなにきずなが深まったときはないと、何度もいわれておりますけれども、私はかなり懐疑的に考えています。

簡単に考えてみても、例えば在日米軍の再編の話ですとか、一見マイナーな問題である牛肉の問題ですとか、もしくは最も重要な対中関係一つをとっても、細かくみるとかなり日米間で見解の相違があるわけで、みんな未決の状態でいまも残っているわけです。ですから、いまはムードミュージックで、音楽がバックに流れているので目立たないかもしれないということで、水面下の問題ということで済んでいるかもしれませんが、一たんこのムードミュージックが鳴りやんでしまうと、底流に流れていた問題が表面化するという可能性は幾らでもあるわけです。

ブレアとブッシュのコンビということになると、ブレアは左派、ブッシュは右派ということで、あの2人ほど不似合いなコンビはないと思うかもしれないけれども、多分、ブレア氏側の方に、ほとんどモラル的な観念で確固たる信念がありまして、ブッシュさんが標榜しているところのテロに立ち向かっていく姿勢ですとか、この中にはイラク侵攻まで入ってしまったわけで、個人的にはあれは惨憺たる結果をもたらしたと思っていますけれども、本当にいま、ブレアさん自身、真剣に心底からブッシュさんの考えをベースにして、上辺では政治的に差異があるかもしれないけれども、より深いところで信念的に通ずるものがあったということで、いままで来ているのだと思います。ですから、ブッシュさんとブレアさんの間は、聖書を囲んでのミーティングというの

が最後の場にはふさわしいのではないかと考えていますけれども。

飯倉穰（個人会員） 小泉政権で何も解決できなかった問題として財政の問題がある。日本の財政はいつパンクするかわからない。大変なインフレということだって考えられる。ピリングさんは、チリとアルゼンチンにいた経験から、この点について日本の財政再建はどうしたら可能か、どうなるのか、ということについて見解をお聞きしたいと思います。

ピリング 実は同じような質問を日本赴任直後、数名の方から受けました。しかしアルゼンチンと日本には大きな違いがあります。たくさん違いはあるのですけれども、最も重要なことを最初に申しあげれば、アルゼンチンの債務というのはほぼ100%対外債務であったということ。つまり、アルゼンチンの国民以外の人たちが持っていた債権であるから、もちろん債権は迅速な返済を望む、ということであります。日本の債務というのは、日本人が保有しているわけですから、もちろん債権者としては返済は望むけれども、一応これは国内債務だったことです。

さらに違いというのは、日本の経済のファンダメンタルズは強いということで、強固な基盤を持っている経済が日本にはある。一流の会社もたくさんあって、物をつくって世界に十分売っていける、そして外貨を稼げる力があるということです。でもアルゼンチンはそういった力はありません。もちろん、農業部門はそれなりに競争力がありますが、アルゼンチン経済の全体の比率からして、大きなものではないということで、日本にはもう全然負けているということです。日本の強さというのは、これからも長く続くと思います。

チリを弁護するうえで申しあげたいんですけれども、チリは非常に財政が強固であるということで、債務も大きくありませんし、輸出力も十分あるということでもあります。ですから、チリは全く状況が違うということです。

（文責・編集部）